

---

# 蝉女

時風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

蝉女

### 【Nコード】

N9876E

### 【作者名】

時風

### 【あらすじ】

友達のドタキャンの所為で暇になった男。その男が暇つぶしに町を眺めていると、蝉の抜け殻を頭に大量に乗せた女が歩いているのを発見してしまう。異様な容姿に心惹かれる男。この2人の出会いは何をもたらすのだろうか。

(前書き)

この小説は、しょこたんこと中川翔子さんが蝉の抜け殻を頭につけたという話を起点に書きました。

中川翔子さんありがとうございます。

それは絶好調だった太陽に陰りが見えてきた9月初旬、風が冷えてきて大気に秋を感じる事ができるようになった日のこと。一人の男が広場に立っていた。

その百貨店に隣接する広場には色取り取りの服で着飾った人々で溢れかえり、広場に接する道路を挟んで取り囲む様にビルが立ちならぶ。道行く人々の顔には柔らかい光が照らされていた。

そんな広場に呆然と立つ男は空や待ち行く人を手持ち無沙汰に眺めている。約束をドタキャンされた男はこれからどうするべきか悩んでいたのだった。

悩める男が待ち行く人をしばらく眺めていると頭に何か大量に載せた女が歩いて行くのを目撃した。

気になった男は、何が乗っているのか確認してみたくなった。そして男が歩く人にぶつからないように女を追いかけて、2メートルまで差を縮め確かめるとそれは蝉の抜け殻だった。

おいおい、マジかよ。……って、なんで皆騒がないんだ？ これは異常だろう？ 知らない振りするなんて可笑しいだろう。男は周りを確認しながら訝んだ。周りの人間は蝉女（正確には蝉の抜け殻を頭の中心から約10cmにぎっしりと絡ませた女）をさも普通の人間だという風に扱って騒いでいない。

こんな状況で男が考えられる事態は蝉の抜け殻を頭に絡ませるのが流行っている、または男しか気づいてないの2つだった。だが、どっちにしても不気味にかわりなかった。男の好奇心が沸きあがる。「確かめてみるか」

すると周りの人間が独り言をもらす男のほうをチラリと見てすぐに目を逸らす。

俺はいいから、もっと蝉女に注目しろよ。

そう文句を言いながら、男は頭を掻きつつ尾行を開始した。男の

今日の予定が決まった。

男は黙って蝉女の後を尾けていた。男の服装はポロシャツにジーパン、手ぶらで首元にはネックレスが自己主張する。身長は平均的で体型は痩せていた。一方の蝉女は、チエツクのワンピースにぺたんこ靴、レザーバックを持ちストロールを巻いていた。体型は小柄で、頭以外は落ち着いた雰囲気を持つ。

蝉女と男が歩く道は、街路樹よりも大きな影を落とすビルに挟まれていた。雑多な人間に様々な建物。どこに続く分らない道がくつき、人はみんな他人に無関心。沢山の人間が同じ道を歩いているのに一人として同じ方向を見ている人間はいなかった。

男は蝉女を見ながら考える。蝉女の行き先を。目的を。

この女は何をしたいんだろうか？ 蝉の抜け殻なんか頭に寄せ、街を平然と歩いている。不思議な奴だ。

男はそう思いながらも初めの頃の不気味な気分が薄らぎ、街行く人々は知らない秘密を自分と蝉女だけが共有しているということこそばゆい感覚を持ち始めていた。

そんな蝉女と男の不思議な関係はしばらく続く。

そして5分ぐらい歩いただろうか。1軒のカフェの前に着くと蝉女がその中に入った、男は一瞬悩んだが続けて中に入った。

男が金属製の無機質なドアノブを回し中に入ると、店内は薄暗い照明に低音の音楽が流れていた。待ち構えていた店員にどこに座るのか男は聞かれ、蝉の抜け殻が絡まった頭の後ろに座ることにした。蝉女は通行人を見れる窓側で一番奥から2番目の席に、壁を見る形で座っていた。男は蝉女の背中を見ながら自分の席に向かい、蝉女の後姿を観察できる位置に座る。そして適当にコーヒーとパスタを頼むと、蝉女の頭の観察を始めた。

男が蝉女の頭を改めて観察してみると頭頂部にぎっしりと並べてある蝉の抜け殻のお陰で地肌が見える余地は無く見事蝉の抜け殻に溢れていた。その姿は芸術的とさえ言え、途方も無い時間が掛かっ

たことは想像に難くなかった。

アブラゼミかクマゼミ、またはミンミンゼミのだろうか？

くだらないことを考えながら男はコーヒーを飲む。こんな休日も悪くないと感じ始めていた。蝉女を見たときは驚いたが、今では休日を彩ってくれる大事なパートナーのように錯覚している。不思議な縁だ。

辺りには陽光と照明の暖かな光が満ち、ゆるやかなテンポの曲と合わさって穏やかな時間を演出していた。

男がぼんやりしていると、蝉女がいきなり立ち上がり出口に走っていった。男は慌てて顔を伏せやり過ごす。しばらく様子を見てみると、蝉女は、がたいがいい男を連れて席に戻ってきた。

二人は最初普通の恋人同士の様だったが、蝉女の頭の所為で険悪な状態に移行しつつあった。さらにヒートアップしていく二人はどんどん声が大きくなっていく。

「何をつけていようと私の勝手でしょう」

「だからって蝉の抜け殻をつける馬鹿がいるか？」

「好きなんだもん。しょうがないでしょう」

ガチムチの男は立ち上がって言った。

「いいかげんにしろよ。お前のそういうところに飽き飽きしてるんだ。惚れた俺が馬鹿だったよ。じゃーな」

蝉女の彼は別れを告げると去っていった。場には嫌な空気が流れる。

周りにいた人間は今気づいたかのように蝉女の頭を指差しコソコソし始め、蝉女は蝉女で俯き泣き始めた。

男は無言で席を立つと、蝉女の目の前の席に座った。蝉女は俯いたままで反応しない。

「なんでもいいです。話してみてください」

男が蝉女の頭頂部をみながら言うと、蝉女は堰を切ったかのように話し始めた。

自分は周りの人とは違う人間であり理解してくれる人間はいない。

昔から変わっており、周囲と違う行動をしていた。今日の頭の蝉の抜け殻も抜け殻が好きすぎてつけて、彼に見てもらい褒めてもらいたかった。等のことを俯き、途切れ途切れになり声が震えながらも話した。

「私だつて、異常だつて言われたくない。でもこれが私にとって普通だから」

男は蝉女の表情は見えないし顔さえ見たことも無かったが、蝉女が苦痛にさい悩まされていることだけはわかった。異常な行動は理解できないが、苦痛だけは取り除いてあげたくなつたのだ。

「蝉女さん。俺にはまだ貴方の事が理解できてません。でも貴方のその直向な姿は尊敬できるし、惹かれます。他の人が何を言おうと気にしないでください。俺が理解しますし世の中の普通にしてみせます」

蝉女は初めて顔を男に見せた。その顔の肌は清水のように透き通っていて、目は吸い込まれそうなほど黒い。整つた小振りな鼻に唇は湿って艶かしく、泣いていた目は軽く充血していたが、それが逆にコケティッシュな雰囲気を放っていた。凄い美人である。

男を見つめた彼女は、その顔に笑みを乗せる。その瞬間男はいろいろ考えてしまった。これからいろいろ苦労しそうだけど、こんな女の子なら我慢できるなあとか、いままでろくなことが無かつたけど生きてて良かったとかだ。

蝉女は笑みのまま、口を開いた。男はドキドキして思考がおかしくなる。

くるのか？ ついにくるのか？ 俺の時代が!!!

男の緊張が最高潮に達したそのとき、蝉女はたつた一言

「キモイ」

現実とはこういうものだろうな。蝉女の顔を見ながら男は思ってしまった。

(後書き)

感想、批評等ございましたら書き込みよろしくお願いいたします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9876e/>

---

蝉女

2010年10月8日15時18分発行